

井上光晴 『手の家』と 深沢七郎 『榎山節考』

秋山 康文

突然「手の家のもんはもう嫁にはなれんぞ」と、いねがびつくりするような声をだした。

「なんちゆうこと」親雄はいねをとめた。

「なんちゆうこともなか、手の家のもんは罰が当たるとる」いねは喚いた。

「いねさん、罰はなかぞ、手の家も隠れも一緒じゃけん」寛之はいった。

(略)

「手の家の女がきてから不幸なことばかりじゃった、親雄が可哀想じゃ」いねはいった。

(略)

「いやぞ、手の家のもんはうちで通夜はさせん」いねはまた喚いた。

「やめんか」親雄はいった。

(略)

「手の家のもんが残るなら、おれは家にはおらん、ああ、親雄が可哀想じゃ」いねは声をあげて泣きだした。

井上光晴『手の家』のこの部分を読んで私は、深沢七郎『榎山節考』の「おりん」とその息子「辰平」とのことを思い出していた。そして私は、『手の家』の「いね」と『榎山節考』の「おりん」とには、紙一重の差しかないのではないか、考えていたのであった。

「おりん」の「信州の山々の間にある村」では、人は七十になれば、食いぶちべらしのために、榎山へ置き去りにされるのであったが、「おりん」は、若いころには自慢であった丈夫な歯を石にぶつけて自ら欠いて（食料の少ないこの村では、働きの少ない老人であるにもかかわらず歯が丈夫なことは恥ずかしいことなのである）「きれいな年寄り」となって、息子の背にかつがれて、暴れることもなく、素直に静かに、榎山に置き去りにされるのであった。彼女は、孝行息子との温かい交流のもとに、彼女の村の身の丈にあった（宗教的）世界観の物語を、静かにまっとうしてみせたのであった。

「いね」も、彼女の村の、隠れの信仰が、「手の家」をはじめとするカトリックによって乱されることさえなければ、「おりん」のように、息子思いで、そして従容として毅然としたある種の美しさをもって語られ得るような、そのような素質の持ち主である可能性も否定はできないのではないか、そんなことを考えたのである。そして、この紙一重によって生まれたに過ぎない（醜さ／美しさ）という差に、私達は、よくもまあ、惑わされがちであるのではなからうか、と。そしてこの紙一重の差を生んだものは、彼女の預かり知らぬところから来たものなのである。

自らの世界観、そして物語を、自分の生きる世界とは無関係であるとおぼしきところからの一撃によって、思うようにはまっとうすることができずに、あるいは閉じることができないでいるところで、鬱積した感情が、硬く人をはねつける言葉を伴って爆発する。

そして、このような「いね」の（宗教的）世界観の傷から発せられた炎は、もちろん、彼女一人のこととして終わってはいない。

重乃さんのこともうちのこともいうてならんよといって整子は召された、ほかのことは何にもいわずに、うちと輪島先生が夫婦になれるように最後まで心にかけてながら整子は召された、といまにも叫びだしたいような気持ちで考えながら、りえはぼうぼうと音をたてて燃え上がる整子の棺の炎をみていた。

ぼうぼうと小さい土の窯の中で整子は燃え上り、葬式が始まる前に訪ねてきた輝秀のいった言葉を炎にした。伯父さんに誰がいうたのかしらんが手の家のことはしれたぞ、困ったことになった、だましたことはあやまつてしまえばまあそれでもいいが、うちのへんでは長崎の町からというだけで嫁には貰わんとだからねえ、と輝秀はいったのである。

（略）

やっぱり隠れは隠れのしきたりを守っていかんと、こういうことになるんじゃないかとでしようか、もう順子は嫁にいけないという噂まで流れよりますから、本人たちが可哀想です。もしまた手の家ができて、長崎から親がピカドンでやられた子供たちがぞろぞろ入ってくると、順子だけが嫁にいけん位ではすまんことになります。切丸部落は血がとまらん、という噂がでたらもうそれでエタと同じことになりますけん、誰も嫁にもいかれんし嫁にもとれん、という国定の声がどろどろの油になってそれにふりそそぐ。

ぼうぼうと小さい土の窯の中で…。

親友を送るのに、なぜ、怒りの炎をもつてしなければならぬのか。親友を蔑ろにする者たちの言葉などを薪にした炎によって、なぜその親友を送らなければならぬのか。このような限界は、確かに私の限界に似ているのだけれども、しかし、私達が死者を弔う方法とは、世界観・物語が破れかけているという一種の危機的な状況の中で、常にこのようなものでしかありえないのか。

こうした飛び火は、ひとり原爆の火によるものではないのであらうけれども。